

三河方言の文末形式の記述的研究 —1—

又 平 恵 美 子

キーワード：三河方言、文末形式、聞き手めあて性、確認用法、だろう、じゃないか

要 旨

本稿は三河地方の現代の方言の文末形式について、記述的研究をおこなう。本稿でとりあげたものは、

- ・動詞＋「-in」
- ・動詞＋「まい」
- ・「ら・だら」
- ・「じゃん」（疑似標準語の「じゃない」との関連する部分を中心に）

以上の形式の接続形式、意味、用法を検討し、「ら・だら」「じゃん」類にはく共有認識を形成する>ことを目的とする確認要求に用いられることがあることを指摘した。

1. はじめに

現在の現代日本語研究については、モダリティ階層の外側のほう^{*⁽¹⁾}、品詞で言えば一部の助動詞や終助詞などの研究は、相手にどのように伝えたいかを表示する「聞き手目当て性」を問題としているが、その大筋は疑似標準語^{*⁽²⁾}に絞られている。しかしここ数年「現代日本語方言文法」の研究も徐々に進み、その結果が「疑似標準語」の研究に新たな展開をもたらすということも起こっている。^{*⁽³⁾}

本稿は、三河方言^{*⁽⁴⁾}の「聞き手めあて性」を持つ文末形式に着目し、これらの記述的研究をおこなう。これによって「現代疑似日本語文法研究」の進展の足掛かりとなることも期待したい。

本稿で紹介する形式は以下のとおりである。

<形態・品詞>	<形 式>	<意 味>
活用語尾変化	動詞連用形+in	柔らかい命令
助動詞	まい	勧誘
助動詞	ら・だら	疑似標準語「だろう・のだろう」に相当
助動詞	じゃん	疑似標準語「じゃないか」に近似

これらは一集落の極く狭い範囲で使われているものではなく、三河地区全域にわたる地方共通語としての文末形式と考えるとよいものであると思われる。

なお、本稿の本筋ではないが、予備知識として、関連するいくつか特徴的な点をあげておく。

(A) 疑似標準語でも、慣用的にはアスペクト表現は母音脱落して「～しておく」→「～しとく」になり、「～している」→「～してる」のようになるが、三河方言では存在の意味の「イル」が「おる」であるため「～しとる」になる。^{*5)}(なお「～してある」は「～したる」にはならない。)

(B) 否定の助動詞「ナイ」は「ん」となる。

ex. 読まん、行かん、いかん (=いけない)

(C) 理由の「カラ」は「で」になる。「だものだで」(=ナモノダカラ)は「だい」になることもある。

ex. 次は急行だもんだい乗れん (=急行なものだから乗れない)

(D) 三河方言では、疑似標準語の「のだ」文が形態として「の」があらわれない。例えば、「行くんだ」は「行くだ」になり、「行くのか」は「行くだか」になる。

2. 「-in」

命令形よりは、やや柔らかい言い方になる「～しなさい」に相当する言い方が、三河方言では五段活用動詞は連用形のとに「ん」、上一段・下一段活用動詞は「りん」をつける。

		三河方言	疑似標準語
五段活用	走る	はしりん	走りなさい
	行く	いきん	行きなさい
上一段	着る	きりん	着なさい
	見る	みりん	見なさい
下一段	あげる	あげりん	あげなさい
	出る	でりん	出なさい
カ変	来る	おいでん	来なさい
サ変	する	せりん/しりん	しなさい

つまり、いわゆる活用語幹に付属するのではなく、終止形でいう「-u」の部分が「-in」になり、これが「(柔らかい)命令」というMoodを持つことになる。

疑似標準語では、この「(柔らかい)命令」に相当する「～なさい」「～ませ」は全て連用形に接続するが、三河方言では五段活用のみこれと同じ接続をする。一見不規則なため非合理的にみえるこの現象は、語の弁別に役立っている合理的な面もある。

もし単純に全て「りん」を付ける、ということになれば、「行く」は「イキリン」ということになり「生きる」との区別がつかなくなる。

或いは全て「ん」を付ける、ということになれば、上一段・下一段は「着ん」「出ん」などは、否定と区別がつかなくなる。

ただ「見る」に関しては、「みる」も可能になる。可能になるのは「試みる」の意味での「～てみる」や（例文(1)）慣用的な表現の場合（例文(2)）などで、逆に「視覚を用いる」という本来の意味での「みる」に近づけば「～みる」にはなりにくくなる。

- (1) 「じゃあちょっと、そこ読んでみん」
- (2) 「それ見ん。やっぱり失敗した。」
- (3)? 「教科書を見ん」
- (4)? 「ちゃんと先生の顔を見ん」

おそらく「試みる」の場合や、慣用的な表現の場合には否定形で用いられることが少ないため、否定形であるという可能性が減少するためであると思われる。それに比べると、本来の意味での「みる」の方が、否定形で用いられることもあるので、同形であるとなると、文意に誤解を生む可能性がある。

この他に、吉川(1993)によると「おいでん」は丁寧な言い方。「きん」ともいう^{*(6)}とある。この場合の丁寧さとは、個人が場面によって使い分けているものであるのか、層によって使い分けられているものであるのかは不明である。しかし「おいでん」が高圧的という意味での、丁寧さがない言い方になれば「来い」になるように、もともとこの「-in」は命令の中でも柔らかさを持つ、と考えられる。

3. 「まい」

三河方言で「まい」は勧誘を表す。

- (5) 「ぼくらの将来のことを考えるまい」（あるいは「～考えまい」）
（疑似標準語「～考えよう」の意）

勧誘をも表す疑似標準語の「う・よう」とは異なるのは、

- (6)* 「ぼくは今日こそお母さんに謝るまい」
（疑似標準語「～謝ろう」の意で）

のように意志の表明や独り言では用いない。必ず誘う目的である聞き手がいる。

接続については、

- (7) 「みんなでカラオケに行くまい」（あるいは「行かまい」「行こまい」）

(8) 「明日はのんびりテレビでも見るまい⁽⁷⁾」(あるいは「見よまい」「見まい」)

語により、人により、で曖昧であるように思われる。

吉川(1993)では「名古屋は終止形「行くまい」豊橋は未然形「行かまい」である」としているが、同書の別項では、豊橋のことばに「行くまい」と表記している。山口(1987)では、勧誘「まい」は中部全般にわたり、

遠州	(踊らまい, 行かまい, 見まい)
浜松	(踊りまい, 行きまい, 見まい)
名古屋	(踊ろみゃー, 行こみゃー, 見よみゃー)
三河	遠州型と(踊るまい, 行くまい, 見るまい)との共存

としている。そして共存する地域では「[勧誘]と[否定推量]⁽⁸⁾はアクセントで区別される」とある。しかし区別・弁別の指標となるのは、アクセントというよりも、「勧誘」の方が「ま」を若干のばすような傾向がある(ex. 行こまーい)という点であると思われる。もっともこれも必ずしもそうなるとは限らない。

ただ、発話の環境があるため、実際「勧誘」であるのか「否定推量」や「打ち消し意志」であるのかは、誤解・混乱が少ないと思われる。例えば、疑似標準語でも

推量「明日は晴れよう」

意志「(僕が)行こう」

勧誘「(みんなで遊園地に)行こう」

というように、()内は実際に発話されなくても、談話の流れや状況から推察可能である。また、否定と勧誘も、イントネーションで弁別されるが、

否定「行かない(。)」

勧誘「行かない(?)」

文字による表記の場合でも、()内の記号が付されなくても、文脈から推察可能である。

ただ他地域の勧誘「まい」は、疑似標準語で、遠州は「ない」、浜松は「ましよう」、名古屋は「う・よう」と置き換えが機械的にできるが、三河方言に対して、このように対応するような形式はない。

4. 「ら・だら」

三河方言では、疑似標準語の「だろう・でしょう」に相当するものが「ら」で表現され

る。動詞・形容詞文に接続して、

(9)「私は行くけど、あんたも行くら？」

のようになる。またこれと似た形式で、

(10)「私は行くけど、あんたも行くだら？」

「だら」がある。(9)の「行くら」と(10)の「行くだら」の違いを、会話の背景がわかりやすい例から説明すると、「ら」は

(11)「ね、やっぱりその服じゃ小さいら？」

のように、＜話し手と同様に聞き手もよく知っている・わかっていると目される情報＞に用いられ、疑似標準語「だろう・でしょう」に相当する。そして「だら」は

(12)a「さっき職員室で先生に飴もらっただよ」

b「あれ、あんた先生に怒られに行っただら？」

＜話し手は断定できないが、聞き手の方がよりよく知っている・わかっていると目される情報＞に用いられ、これは疑似標準語「のだろう・のでしょう」の分布と一致する。

ただし、名詞述語文に接続する場合は

(13)「奥さん見てみん。このトマト新鮮だら？」

のように必ず「だら」となり、疑似標準語での「だろう・でしょう」と「なのだろう・なのでしょう」との区別がない。

	三河方言	疑似標準語
動詞・形容詞述語文	ら	だろう・でしょう
	だら	のだろう・のでしょう
名詞述語文	だら	(なの)だろう・(なの)でしょう

イントネーションのパターン⁽⁹⁾も、

(14)a「あんたが先生に言いつけただら」

b「だって「怒らんもんだい言え」ちゅうだもん」

a 「あんた絶対誰にも言わんって約束しただら」

など、疑似標準語の「だらう」と同様である。

疑似標準語の「だらう」は、例えば、一度は自分の意見に納得してくれなかった相手が、あとになって考えて、自分の意見に同調しなおしてくれた、というような場合に対するコメント（例文(15)）や、これからの話を進める上で必要な知識が相手にも伝わったかどうかをひとまず確認する（例文(16)）ために用いることがある。このように＜共有認識を形成する＞ことを目的とした＜確認要求＞の「だらう」は、三河方言でも「ら」である。しかし、イントネーションは、

(15) 「あ、ごめん。そっちの答えの方があっとる」

「ね、私の方が正しかったらあ」

(16) 「あそこに高いビルが見えるらあ、あれウチのお父さんの会社だに」

のように、「ら」が高くなり急速に下がるイントネーションを持つ。これは三河方言話者が、疑似標準語を用いているときにも同じように

(15)' 「正しかったでしょう」

「しょ」が高くなり急速に下がるイントネーションで発話する傾向がある。^{*(10)}

「思う」等の引用句内など文末ではないところでは、疑似標準語では「だらう・のだらう」のいずれも用いられるが、三河方言の場合、

(17) 「たぶん僕が行かされるだらあと思うよ（／*行かされるらあと思うよ）」

になり、「だら」になる。また反実仮想の「だらうに」「のだらうに」は、

(18) 「メットさえ被ったりゃ、死なずにすんだらあに（／*すんだらあに）」

となり、やはり「だら」になる。

5. 「じゃん」

「じゃん」は疑似標準語の「じゃない(か)」に形態も用法も似ているが、そのまま分布が全く一致するというわけではない。

「じゃない」は「で・は・ない」と分解して考えることができるが、「じゃん」の「ん」は否定の意味を持たない。そのため「～ではない」の意味では「じゃん」にはならない。

(19) 「こんなものは純米酒じゃない／(*じゃん)」

また、ある事態に一つの答えを仮定したが、そうでない可能性も残されているため断定できないような場合、つまり<疑念>の「～ではないか」の意味での「のじゃないか」は

(20) 「あの猫は保健所につれてかれたじゃないかやあ」

となり、「じゃん(か)」は用いられない。

この疑念を問いかける「のじゃない(の)か」質問も、

(21) 「あの猫は寿命で死んだじゃないだかん？」

となり、やはり「じゃん(か)」にならない。

「じゃん(か)」が疑似標準語の「じゃない(か)」と同じように用いられるのは、反論・発見などに同意要求をする場合、

(22) a 「勉強なん全然しとらんよ。昨日なん3時間しかしとらんし」

b 「なんだん。3時間もやととるじゃん(か)」

(23) 「あれま、誰かと思ったら田中くんじゃん(か)」

そして、4. 「ら・だら」と同様な、<共通認識を形成すること>を目的とする<確認要求>の場合である。

(24) 「ザリガニって竹輪とか食べるじゃん(か)あ、糸通してつるせば…」

のように、今後談話を進めていく上で必要な情報が、<相手もすでに知っているはずである>と目された場合に用いられる。

以上の疑似標準語の「じゃない(か)」に関連する問題をまとめると、以下の表ようになる。

	三河方言	疑似標準語
否定	じゃない	じゃない
疑念	じゃないかやあ	のじゃないか
疑念の質問	じゃないだかん	のじゃないのか
同意要求・確認要求	じゃん(か)	じゃない(か)

また、「じゃん」が「ね」と複合して、

(25) 「私、こないだグアム行ってきたじゃんねえ まず名古屋空港行って…」

のように疑似標準語の「～のね」のように、聞き手が知らないと目される事情を説明するときに用いられる。したがって

(26)a 「あのビル出入口が一カ所しかないじゃんか \cap あ」

b 「知らんけど」

a 「あ、一カ所しかないじゃんね \cap ー」

というように、最初は聞き手と共有知識があるという前提で話し始めたが、そうではなかったということがわかったので、その前提部分から仕切り直しをする、という時に「じゃんね」が用いられる。

この「じゃん(かあ)」「じゃんねえ」と「らあ」の違いは、

じゃん(かあ)	聞き手も、すでに知っていると思われる情報
じゃんねえ	聞き手が知らないと思われる情報
らあ	話し手と同様に聞き手も知っている・わかっていると目される情報

ということで、「じゃん(かあ)」と「らあ」は、殆どの場合に互換可能である。ただ、「じゃん(かあ)」は<すでに>知っている情報であるため、例えば発話中に眼前に展開されるものをもとに共通認識を形成していくような場合には用いられにくい。

(27) 「おいおい、ちょっと見て。あのおじさんの袖、あやしいら (／??あやしいじゃんか) きっと手品のタネが隠してあるだに」

またこれらの確認用法はイントネーションのパターンが、それぞれ「 \cap 」の同形である。この他に「じゃん(か)」に終助詞が接続するものは、

(28) 「なんだん、ハサミここにあるじゃん(か)よー」

(29)a 「結局私らばっか損しとるじゃん(か)ねえ」

b 「ねえ 本当ど損こいたじゃんよねえ」

と、やや女性的な疑似標準語の「じゃないのよ」「じゃないのねえ」のような「じゃないの+終助詞」に相当する使用もできる。^{*⁽¹¹⁾}

6. おわりに

以上、三河方言の「聞き手目当て性」を持つ文末形式のうち、以下の記述をおこなった。

1. (柔らかい)命令「-in」の活用別接続形態
2. 勧誘「まい」の接続形態
3. 疑似標準語「だろう・のだろう」に相当する「ら・だら」について接続と用法を紹介した。
4. 「じゃん」について、形態と用法が近似している疑似標準語の「じゃない」と関連する部分について、紹介した。

また、「ら・だら」「じゃん(か)」「じゃん(ね)」には<共有認識を形成する>ことを目的とする確認要求に用いられることを指摘した。

今回は紙幅の都合で、「聞き手目当て性」を持つ文末形式のうち、終助詞に関するものをとりあげられなかったが、これについては、又平(準備中)で扱うことにする。

注

- * (1) 仁田(1991)益岡(1991)など
- * (2) 「疑似標準語」「地方共通語」の名称は真田(1993)ロング(1993)による。
- * (3) 例えば富山方言を扱った井上(1993)など。
- * (4) 三河地方は、愛知県の東部で、筆者の育った(満2歳~18歳)地域であるが、現在は他県に住んでおり日常生活で三河方言を使用する機会は少ない。そのため、本稿にあげる三河方言のデータは、筆者の記憶を忠実に再現した実例と、筆者と同年代の「生え抜き住民」の人の会話を、電話で自然傍受した実例に基づくもので、非文(*)の例に関しては、念のため前記の人に判断してもらったものであることを、ここにことわっておく。
- * (5) 三河方言話者が疑似標準語で話す場合、「いる」が「おる」と同様に頭高アクセントになる傾向がある。
- * (6) 筆者の妹によると「来る」は「こりん」であるという。
- * (7) 疑似標準語の「う・よう」を、そのまま「まい・よまい」に平行させた形を用いる話者もいる。
- * (8) これに関して「否定推量」「打ち消し意志」などの用語があるが、本稿の筆者は「否定」と「打ち消し」について、前者は「事実として存在しないこと」後者は「事実として存在しないと話者が思うこと」であると捉えている。そして、「否定推量」は「あることがらが存在しないと想定すること」で、打ち消し意志は「あることを今後話者が「しない」と決意すること」であると捉える。
- * (9) イントネーションの表示記号は又平(1996)に同じ。
- * (10) 特に相手に共有認識を形成することを目的としないような場合、(「この様子だと、明日は晴れるでしょう」など)は疑似標準語と同じイントネーションである。
- * (11) 男女ともに使用できる。

参考文献

- 井上 優(1993)「発話における『タイミング考慮』と『矛盾考慮』——命令文・依頼文を例に——」
『研究報告集4』 国立国語研究所
- 金水 敏(1995)「日本語史からみた助詞」『言語』24-11 大修館書店
- 真田真治(1993)「方言」『國文學』38-12 學燈社
- 柴田 武(1988)「日本語小事典」『方言論』 大修館書店
- ダニエル・ロング(1993)「疑似標準語と地方共通語」『大阪樟蔭女子大学論集』30
- 田野村忠温(1988)「否定疑問文小考」『国語学』152
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法1——「のだ」の意味と用法——』 和泉選書
- 土屋信一(1993)「[「のだろう」]以前——江戸語の「のだろう」の用法——」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』 三省堂
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 橋本 修(1992)「終助詞「ね」の意味とイントネーションの型」『日本語学』11-12 明治書院
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』 くろしお出版
- 又平恵美子(1996)「終助詞の研究——「っけ」の機能——」『筑波日本語研究』創刊号 筑波大学文
芸・言語研究科日本語学研究室
- 吉川利明(1993)『豊橋の方言』 東海日々新聞社
- 山口幸洋(1987)『静岡の方言』 静岡新聞社

(1997年8月31日 受理)

